

日本語は易しいか

近代中国人日本語学習史研究からの一視点

沈 国威

(関西大学外国語学部教授)

要旨

長く漢字文化圏の書面語として位置した漢文とは異なり、日本語は近代までに商業活動、古典の伝承、新しい知識の受容、そのいずれの面においても重要な言語ではなかったと言わざるを得ない。しかし明治期に入ってから日本語が民族国家の国語へといち早く成長を成し遂げた。西洋文明と結びつけられ、近代の知識を伝える言語となった日本語は、東アジアの諸国にとって学習する対象言語となり、他の言語に絶大な影響を及ぼした。日本語の学習に関しては、植民地支配、植民地における言語政策の推進が背景にある台湾や朝鮮半島の事情と異なり、近代中国はむしろ自ら進んで日本語を学習しようとしたのである。本稿は二〇世紀初頭、中国人はいかに日本語を認識し、それをマスターしようとしたのかを当時の教科書を手がかりに、近代中国の日本語学習史を辿ってみた。

キーワード：国語 漢文 新漢語 日本語学習 言語政策

中国の研究者・劉進才氏は、アンダーソンが提起した近代民族主義の発生と民族国家の言語・国語の形成との関連について、「ヨーロッパ各民族言語の形成において、それぞれの現代民族国家の言語の誕生は古い聖言語・ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の束縛から脱却し、地域方言へ接近し、また現代的印刷術により各方言地域において書面語を確立させた結果である」と解説し、また、「清朝末期の中国にとって、民族主義の発生と印刷言語の形成はヨーロッパと同じではない」とも指摘している^[1]。中国はヨーロッパと同じではない、特に印刷言語の面では同一視できないとの主張は肯けるが、近代におけるアジア諸国の国語形成は、個別言語の問題である以前に、漢字文化圏内の国・地域がいかに民族国家として国語を獲得するかという東アジア全体が直面する近代的な課題を解決しなければならないという点において、むしろヨーロッパと多くの類似性を有する。

われわれは問題意識を伝統的な言語が近代民族国家の言語に進化していくという側面まで拡大させる時、次のような事実を直面するであろう。つまり表意文字の漢字は、片方では「神聖言語」の古典性を有しながら、片方では言語を超越する書写記号体系になりうるという現実である。漢字は、漢字文化圏に言語の記録手段を提供するのみならず、漢字によって記録された古典は、文章の規範をも示しているのである。漢字によって表現が可能となったが、その表現の自由度が漢文によってまた厳しく制限されている。従って域内の各国の近代国語の成立は、まず脱漢文の過程を経なければならないが、漢字はたやすく切り捨てることができなかつた。例えば日本では明治初期から様々な議論があり、また実際の施策も数多く試みられたが、漢字の地位は揺るぎ

なかつた^[2]。それどころか、漢字文化圏は正に古い漢字によって西洋の近代知識を受容しえたのである。現在すでに自らの言語の表記体系から漢字を排除した国家、地域でも大量の漢字音が相変わらず書面語の主要な部分を占めている。

日本語が近代国家の国語へ変身するプロセスにおいて、漢字語が決定的な役割を果たした。新しい漢字語（いわゆる「新漢語」）を獲得した日本語は、迅速に新しい知識を取り入れる可能性を有する言語として、漢字文化圏において初めて非母語話者の習う対象となり、漢文（古典中国語）とロールをチェンジした。かくして東アジアが西洋の知識を受容するに当たり、日本語が他の言語に大きな影響を及ぼすことになる。

しかし、日本語の学習に関しては、植民地支配、植民地における言語政策の推進が背景にある台湾や朝鮮半島の事情と異なり、中国は、むしろ自ら進んで日本語を学習し、日本書を翻訳しようとしたのである。お雇い日本人の招聘や日本留学のブームなど、いずれも明治初期の日本と似ている主体性が保たれていた。筆者の最近の研究の興味は近代以後——日清戦争から五四運動までの間に中国人はいかに日本語を認識し、それをマスターするようになったのか、つまり近代中国人日本語学習史の研究である^[3]。

筆者が考えている学習史は、次の三つの側面から構成されている。

- (1) 学習者側の変遷。これには学習者の知識背景、学習の動機付け、目標の外国語に対する態度などが含まれる。
- (2) 学習内容の変遷。これには目標言語の共時的情況、正書法、文法体系の整備、教科書の編纂などが含まれる。
- (3) 教授者側の変遷。これには教育機関・教育環境、教授者集団の形成などが含まれる。

二〇世紀初頭の日本語は、外国人によって学習される目標言語となるまでまだ多くのことをしなければなら

なかった。本稿は、中国人日本語学習史序説として、まず学習者側の諸事情に注目し、近代中国人の日本語観について考察したいと思う。

2 日本語との遭遇

中国の典籍で最も早く日本語について記述したのが宋の羅大経による随筆集『鶴林玉露』（一二五二年までに成立）である。「日本国僧」の節で日本の僧侶に聞いた話として、日本語の単語を漢字音訳の形で二〇語ばかり記録している。その後も一九世紀中期まで、日本語に関する断片的な記述が主に倭寇対策の書物に見られる^[4]。明治維新後、中国の官吏、商人や中国での布教経験を持つ西洋人宣教師が日本に入国するようになり、実際に日本語に接した。例えば、初代駐日公使・何如璋をはじめ、張斯桂、黄遵憲、傅雲龍、葉慶頤、黄慶澄らが日本語に関する感想を書き残した。日本語の実際は、いわゆる「中東同文」との伝聞からだいぶかけ離れたもので、何如璋は、「日本文字顛倒、意義乖舛」^[5]、「方言殊異、文義支離、繙訳通事、頗難其人」^[6]と困惑していた。いわゆる「意義乖舛」とはつまり中国語の知識では理解できない日本語のことである^[7]。彼らは詩文で、日本語の「奇妙さ」を数多く記録した^[8]。葉慶頤は、「日本與中国地同洲書同文、事物稱名應莫不從同」と日中の「同文殊解」という相矛盾する現実に戸惑いを隠せなかった。彼は、「同文殊解」の原因を「罇鷗伏獵」という誤用に帰している。最も早く日本語を外国の言葉としてその発音、文字、語彙、文法ないし文体の各方面から記述しようとしたのが、黄遵憲である^[9]。黄の記述には想像的な部分もあるが^[10]、文字（漢字の伝来、漢字伝来以前の神代文字）に関しては概ね一八八〇年前後日本国内の日本語研究の水準を反映しており、特に日本語の言語系統、語彙、文法、文体等の特徴に関する把握は極めて正確である。

しかし黄遵憲の日本語観察は、中国社会に共有される知識にならなかった。中国人は、長い間日本語を外国語と考えることなく、外国語人材の養成機関である同文館が設置されて十数年経っても、日本語コースがなかった。そのため初代中国駐日公使・何如璋が東京に赴任する際、英語の通訳を三名同行させざるを得なかった。日本到着後、意思疎通に大きな障害があるため、「只得暫覓通事二名」という有様であった^[11]。後任の黎庶昌が赴任すると、「使署理署需用東文繙訳」を理由に、「招致学生設館肆習」を提案し^[12]、光緒八年（一八八二年）九月公使館で日本語教育を始めた。しかし人材の養成は、遅々として進まなかった。日本語の人材の不足は、一八九八年の戊戌維新の時になっても根本的な改善が見られなかった^[13]。

3 学習動機の転換と日本語教育の黎明期

一九世紀の中国において、人々が英語を習うのは、稼ぎの良い仕事に就くためであった。しかしすでに述べた通り、日本語は商業的な言語でも学術的な言語でもなかったため、外国語として学習する動機付けは相対的に弱い。北京の同文館では、英仏独露などの外国語が教授されるが、日本語が含まれていなかった。一八九七年北京同文館、広東同文館は東文館を設置し、日本語教育を正式にスタートさせたが、まもなく中断した。しかし二〇世紀に入り、日本語ブームが突如として到来した。日本語が新しい知識を吸収するための道具となり、短期間のうちにマスターできる言語と喧伝されたためである。

明治維新後、両国民が行き来するようになり、いずれも旅行記の出版があった。ただし量的にも観察の深さにも日本人による旅行記が勝っている。一八五四年、王韜が錢蓮溪の『琉球雜記』を「採摭概略、連綴成篇」し、『遐邇貫珍』（一八五四年六月号）に掲載し、「以備遊人之考鏡」と序文で刊行の趣旨を述べている。一八

八四年、玉燕という人が『東語簡要』を上海で出版し、巻頭に「茂苑浣花生」という人の序文があり^[14]、次のように書いている。

窃以中外通商、迄今已久、初時不過英、法美諸國而已、繼以泰西各國來者益衆、輯睦愈敦。仰見我朝深仁厚沢、敷被遐荒、視中外如一体、足使海國臣民広開見聞。近則東瀛步武泰西、亦于通商各埠駐設領事、而上海尤首屈一指、且日人于租界建房屋、創市肆、鱗次櫛比、即茶寮之增艷門麗、亦可謂酒天花國中、別樹一幟矣。惟我人之欲啜茗消愁者、苦于語言不通、徒呼負負、亦豈非一憾事乎。余友玉燕居士、取歷東瀛、于該國語言文字、靡不精通、茲因公允來滬、感時事之日新、曠斯人之舌岐、爰將日本要語摘録一編、付諸梨棗、以公同好、俾使中東人民和好益敦、歷遷益盛。

この近代初の日本語学習書は木版で六五丁、編者は、「將日本要語摘録一編」と内容を紹介しているが、日常的な会話が中心で、「茶寮」という歓楽施設で遊女との簡単な会話しかできず、部数も多くなかったようである。一八八九年、日本に数年滞在した葉慶頤が上海で『策齋雜摭』を刊行した。こちらも序文に「俾問禁問俗者作權輿或不無小助」とあり、やはり旅行案内のほうに重みが置かれた。一八九五年、中国公使館隨員の父に従って、しばらく日本に滞在した陳天麒は、帰国後『東語入門』を出版した。これは当時唯一利用できる日本語の学習書と言われている^[15]。巻頭の序文に、

自各國通商以來、我華人之攻讀英法諸文者、日甚一日、惟研究東學者寥寥。蓋亦苦于未得其門耳。
(中略) 余自乙酉年(一八八五)、隨家大人使日本、拳業之暇、兼習東西語。在東京六年、該國語言文

字略能會通一二、愧未博究其奧、詎敢自矜、有得出以問世。然既稍有所知、又烏敢私以自秘。況兩國近又修睦、增開商市。東人之來我華者愈多、貿易日盛而故無人焉。輯一書以啓後學、窃慮言語不通、情必扞格而易啓猜嫌。爰不揣淺陋、緝訊是書、注以華音、既竣友人德惠付印、因誌數語于簡端。

とある。王韜も『東語入門』に序文を寄せ、「近以日人通商蘇杭兩郡、効日東方言者・頗衆、(中略) 東語入門一書、為問道之津梁、舌人之木鐸、俾貿易場中通問答者作先路之導焉」と書いている。この時は錢運溪の『琉球雜記』からすでに四〇年も経った。日本語は、「問禁問俗」の他に貿易の役割が加わった。王韜はさらに、

泰西通商五十年来、效英法方言著書教人者独夥、而於東語缺如。使學者無從入門、未免遺憾。得此補之、可称全璧。念祖果能用心於微者矣。念祖工詞賦帖括、夙承家學、長於詩古文辭。他日珥筆詞垣、雍容備顧問、敷陳古義、闡發新猷、當必戛然異人、可操之於勝券也。而念祖殊弗以此為足。蓋其所志自有大者遠者在。謂士君子讀書、稽古、論世、知人、當明体達用、坐而言者、可起而行、世方多事、明洋務、諳外情、末本兼賅、中西畢貫。庶幾乎、有所裨益於國家、得著富強之實效。此其亟也。區區之東語、云何哉。

とも述べ、日本語書の編纂は余技ではあるが、いずれは世界を知る第一歩に繋がるとする。以上二つの書物の読者は、いずれも中国国内の人たちと想定している。つまり中国を訪れた日本人とコミュニケーションを行うために日本語を学習するものである。

一九〇〇年最初の日本留學生の一人、戩翼輩が『東語正規』を日本の東京で出版した。序文に「輸入文明之

先導不得不求之於語学」とあり、初めて日本語の学習に西洋の新しい知識を獲得するという目的を与えたのである。その後の多くの教科書もこれを編集方針に掲げ、序文に例えば次のような文言がよく見られる。

●然則以個人之学問言不得不学日語、以世界之大勢言尤不得不学日語、至若兩國交際上之關係、更無論矣。（吳啓孫）

●語言者、亦科学之媒介、藉以伝種、藉以播精、且藉以孕育者也。（日語用法彙編一九〇五、畢祖誠、李文蔚）

●間接輸入文明之導線。（日本俗語文典一九〇五再版、吳初、孟先）

いうまでもなく日本語に対する中国人の見方を変化させる契機は、日清戦争の敗北である。敗戦の反省として、西洋の新知識を受け入れる必要を痛感するが、そのための西洋言語学習、西洋書の翻訳は、いずれも短期間では効果が上がることが見込まれず、日本に目を向けたわけである。康有為は誰よりも早く日本の知的資源を利用することを提案した人物である。張之洞による『勸学篇』（一八九八年五月）の呼びかけもあり、一八九八年秋以降、日本を新知識獲得の近道とすることが中国社会のコンセンサスになり、日本書の翻訳、日本留学がブームを迎えることになる。その際、「東文近於中文、易通曉」（張之洞）が説得力のある文言である。また康有為は『日本書目志』の序文で、

日本之歩武泰西至速也、姑自維新至今三十年而治芸已成。（中略）吾今取之至近之日本、察其變法之條理先後、則吾之治效可三年而成、尤為捷疾也。且日本文字猶吾文字也、但稍雜空海之伊呂波文十

之三耳。泰西諸学之書其精者、日人已略訳之矣、吾因其成功而用之、是吾以泰西為牛、日本為農夫、而吾坐而食之。費不千萬金、而要書畢集矣。

と日本書による新知識吸収の利点が強調されている。康有為はまた「進呈日本明治變政考」の中で次のように述べている^[16]。

若因日本訳各書之成業、政法之成績、而妙用之、彼與我同文、則転訳輯其成書、比其訳歐美之文、事一而功万矣。

このように日本語は、新しい知識を伝える西洋言語と同等の価値がある上、西洋言語より簡単である先入観が多くの人々の心を掴んだ。「由東訳華、較訳自西文尤為便捷」^[17]、「事一而功万」というキャッチフレーズが中国に広がり、日本語学習の起爆剤となったが、またその後の日本語学習に濃い実用的な色彩を塗りつけたのである。

西洋の新知識を吸収するには、西洋語を習い、その書物を翻訳するのは本来の姿ではあるが、西洋語は簡単には習得できない。馬建忠は、西洋人宣教師らの口述筆録という翻訳方法に対し、激しい批判を浴びせ、新しい翻訳者の養成について、

選長於漢文、年近二十而天姿絶人者、（略）果能工課不輟、用志不紛、而又得諄諄善誘者之指示、不過二年、洋文即可通曉、然後肆力於翻譯、收效必速。

と提案した^[18]。二年で西洋言語を翻訳できるとは、樂觀的過ぎると言わざるを得ない。その後の日本書を翻訳すべきだと主張する人たち、例えば康有為は、「学好西文非五、六年不可」と指摘する。

4 梁啓超と日本語

日本語は短期間に習得でき、翻訳を行えると考えている康有為は、一八九七年初頭、桂林から弟子の梁啓超に書簡を送り、広西で、学校の設立、外国書の翻訳、新聞の発行、鉄道の敷設の可能性を検討するよう指示した。梁啓超は三月に師に返事し、

日本書同文幾半、似易訳於西文、然自頃中国通倭文者不過数人。超以近日『時務報』『知新報』『農會報』所請日本翻訳艱難情形觀之、而知日本書之不易訳矣。今所最可恃者、謂速聘日人到澳、会同門人學習為翻訳書之用、然而超知其必不能成也。

と上海での雑誌編集出版の体験から「日本書之不易訳」と反対意見を述べたが、しかし日本書翻訳という康有為の発想に大いに啓発を受けたに違いない。一八九七年七月、梁啓超は、『時務報』に「訳書」という文章を連載し、最終回の末尾に次のように書いている^[19]。

日本與我為同文之國、自昔行用漢文。自和文肇興、而平假名片假名等、始與漢文相雜廁。然漢文猶

居十六七。日本自維新以後、銳意西学。所繙彼中之書、要者略備。其本国新著之書、亦多可觀。今誠能習日文以訳日書、用力甚少、而獲益甚鉅。

同じ文章で梁啓超は、日本語を簡単にマスターする5つの理由を挙げている。つまり、

計日文之易成、約有数端。音少、一也。音皆中之所有、無棘刺扞格之音、二也。文法疏闊、三也。名物象事、多與中土相同、四也。漢文居十六七、五也。故黃君公度謂可不学而能、苟能強記半歲、無不盡通者。以此視西文、抑又事半功倍也。

黄遵憲がかつて「日本之語言、其音少」と指摘し、また割り注で「土音只有四十七音、四十七音又不出支微歌麻四韻」と補足している。梁啓超の第一、二項が黄遵憲からの知識であることは間違いないであろう。第四、五項に関しては、『日本国志』の中に具体的な記述がないが、『日本雑事詩』の中に「市塵細民、用方言者十之九、用漢言者百之一而已」という記述がある。ただし「漢文十六七的」はない。第三項「文法疏闊」は、具体的に何を指し、どこから来たのが不明である。というのは、当時grammarの訳語としての「文法」はまだ一般的ではなく、日本語の文法を紹介する書物もなかった。筆者は、日本語に関する梁啓超の知識の一部が日本の漢学者・古城貞吉から得たものではないかと考えている。古城は一八九七年当時、上海の『時務報』で日本の新聞雑誌を中国語に訳している仕事を担当しており、同じく『時務報』主筆の梁啓超とは交流関係があった^[20]。ところで、日本語は覚えやすいかもしれないが、必ずしも翻訳しやすくない。東京清国公使館の査斐は、日本語の翻訳者を求める汪康年に西洋言語より日本語のほうが翻訳しにくいと言っている^[21]。

曠代物色翻訳一節、我國通中西文者、尚不乏人、(上海一區、不難物色) 通中東文者、實不易覓。(署内東文翻譯已不敷用。) 刻下略通東文諸君、或在綏署、或辦交涉事宜、在中國者無論矣。此間能通東語者尚夥、精者亦不過四五人、而能通東文者無人焉。(東文較西文即難、若翻譯法律諸則尤難。)

一八九八年秋、戊戌維新が失敗し、梁啟超が日本に亡命し、初めて実際に日本語に接した。日本行きの軍艦のなかで、すでに漢文体の政治小説を読み、翻訳も試みたと言われるが、日本に到着してからまた万木草堂時代の同級生、羅普より日本語の手解きを受けた。梁啟超は、羅普の協力を得、「和文漢読法」を著した。この小冊子は、かなり正確に梁の日本語学習の過程を反映している。一八九九年四月一日、梁啟超が日本に到着した僅か数ヶ月後、「論学日本文之益」という文章を発表した^[22]。文中で初めて「待訳而読之緩而少、不若学文而読之速而多」と直接日本語を習い、そのまま日本書を読むよう呼びかけた。日本語は漢字が多く訳しやすいとはいえ、翻訳の手続きを経なければならないのは、やはり時間も労力もかかるので、直接日本書を読み、新知識に直に触れることがベストであると梁啟超は考えた。梁啟超は、「学日本文者、数日而小成、数月而大成」と言っている。なぜこんなに短期間でマスターできるかについて、梁は「日本文漢字居十之七八、其專用假名不用漢字者、惟脈絡詞及語助詞等耳。其文法常以実字在句首、虚字在句末、通其例而顛倒読之、將其脈絡語助詞之通行者、標而出之、習視之而熟記之。則可読書而無窒閼矣」と述べている^[23]。一年前の「訳書」という文章にある日本語を覚えやすい五つの理由と比べれば分かるように日本語に対する理解、認識に大きな飛躍があった。これはいうまでもなく羅普のお陰である。実際に『和文漢読法』に全く同じ趣旨が述べられている。

5 『和文漢読法』の功罪

梁啟超の『和文漢読法』は日本語学習者に大きな影響を与え、広範な支持を集めた。邢之襄は『和文釈例』(吳啓孫編著、一九〇一)のために序文を寄せ、次のように述べている。

日本與歐洲文字絶異、猶不避勞瘁孜孜其業如此、而我国之文字、與日本為同源、乃置之不顧、必藉二三訳言者之力、始可以涉獵其書、抑可異矣。

著者の吳啓孫本人は、さらに明白に述べている。

今謀新之士輒曰、淪民智莫急於訳書、而從東文転訳西書、尤為事半功倍。斯説也、余以為不然。夫西書当訳、東書不当訳。何則、東土文字尽與吾同、其所異者、不過数十虚字之間耳。得其鈎勒聯貫之法、循而読之、與漢文無以異也。

そのため、吳啓孫は、日本書から西洋の書物を重訳することは、労力が半分で効果が倍という説に懐疑的である。「穎者数日、鈍者旬月、可以尽通。」という梁啟超の言葉通りであれば、最初から翻訳する必要がなく、直接日本語を読めば良いのではないかと吳は主張する。確かに吳本人は、日本語をマスターするには、時間がかからなかった。彼の『和文釈例』は、和文漢読法の有効性を検証するために執筆したもので、従って「例」

は、漢文体の文章のみであった。いうまでもなくこのような文章にいくら精通しても新知識の吸収には寄与しない。

もう一人日本語簡単説の支持者は、中国国内で短期間のうちに日本語をマスターできた丁福保である。一九〇一年、丁は盛宣懷主宰の東文学堂に合格し、日本語の学習を始めた。彼は東文学堂での勉学は一年足らず（そのうち半年実家にて療養生活を送る）だが、日本語をマスターした。数多くの日本語教科書のうち、編者として唯一日本留学経験のなかった人である。彼はまず『東文典問答』を著し、引き続き『広和文漢読法』を編集した。丁福保は、この二書の巻頭に梁啓超の「論学日本文之益」を全文引用し、賛意を表した。丁福保は、『東文典問答』の序文で、

今歳冬季、陽湖吳稚暉先生自日本赴粵東、途經滬上。謂余曰、東文文法、其緊要處全在動詞助動詞及助詞等。如尽力教人、六七日間、無不通曉者。嗣後即可將普通東文書、隨閱隨查、一月小成、三月業大就。子盍不將文法編成淺說、以餉吾党之好學者。

丁福保の日本語教科書の編纂は吳稚暉の影響を受けたことが分かる^[24]。丁福保は、また『東文典問答』（東文提要）の巻頭に、

或謂学日本文、数日可小成、此言誠非誣也、茲將東文中緊要字句、録成四十一款、倘能依次熟記、即可当数日之小成矣。

本書の巻末に「東文雜記」が付録されている。これは丁氏が日本語を始めた頃の感想などを記録したものである。その中で日本語の文体と言語生活の現状について、次のように述べている。

東文與東語、其同者十七八、不同者十二三。

閱東文書、其難易約分三大類。一即中古文（上古文更當別論）此猶乎周秦至唐宋之散文也。其文法略有與今違異者、此難読者也。然和文之根柢在焉。一俗文、小学読本之首數冊及小説是也、此難読者也（中間半文半話書簡文亦同）。如不通此、則通俗應酬文、無以読也。一即普通文、幸而講学文之書十八九用此文。此文在彼國為難、因漢文多也。至我國人読之則反之。故不欲入三島相交接、因陋就簡、通普通文亦可矣。吾所答問者、即注意於此。然苟通普通文、因而以普通文、進読中世文及俗文、亦如舟之有楫、如車之有輪、不難計日可達也。況其間之階級、自當先普通文、其文之有用、亦當讓普通文（報中字兼有三体文故全報紙或則全能解釈或則全不能通即此之故）。習普通文、愚者三月成、習俗文及話、必一年。非其詞法之難通也。普通文者、每篇之字、素識者十七八。俗文之字、識者不能十四五。文法最易、惟識字最難。聡強之壯年人、一日能記二十字、中數也。積一年方得數千字、乃可通素不通之十六七。西文與東文之難易、亦即在此。習中世文、三月亦可通其法。（東文雜記七八下〜七九）

『東文典問答』が刊行されて一年経たないうちに丁福保はもう一冊の日本語学習書を世に送り出した。『広和文漢読法』である。本書は、石印部分八三頁。丁は巻頭で再度梁啓超の「論学日本文之益」を活字印刷の形で再度掲載し、その後に「東語語法略説」を三頁付している。日付は同じく一九〇一年であるが、額面通りに受け取れないであろう。ただし日本語の品詞、用言の活用、格助詞、文法成分及び構文法について詳細に説明

を施している点から見れば、この時、丁福保は確実に日本語の知識を深めたに違いない。本書は、「広和文漢読法」と名付けているが、むしろ和文漢読法の限界を悟ったのか、例文はすべてこの方法では解説のできない普通の和文、即ち漢字仮名交じり文である。そのためか、丁は、もう一つ書名を用意した。つまり『普通東文速成法』である。このように普通の和文では、和文漢読法は無効であると丁福保は悟ったわけである。丁は、「和文豈可漢読哉。所謂漢讀者、人云亦云耳」と言っている。それならばなぜこの書名にしたのか。丁は「書名、書之記号也。取本有之名而名之、因其記号熟也。此是書之所以名広和文漢読法也。」と説明している。梁啓超に対する敬意と商業的な考慮があったわけである。実は、梁啓超の日本語簡単説には、条件がある。一つは閲読に限定することで、聞いたり話したりすることは必ずしも容易ではない。二は、漢文に精通することである。「若未通漢文而学和文、其勢必顛倒錯雜、習乱而兩無所成」とあり、漢文の知識を最大限に利用しなければ速成が期待できない。数年勉強してまだものにならない人たちは、漢文がだめだからと梁は切り捨てている。指摘しなければならないのは、梁啓超が「聞く、話す、読む、書く」の外国語四技能の区別に気づいたが、日本語には同じ書面語でも文体の違いがあり、漢文調でなければ和文漢読法も適用できないことに、梁啓超が気づいていなかったようである¹²⁵⁾。

日本語の文体、及び取得の順序について『和文読本入門』（一九〇八）は、緒言で、次のように述べている。

和文有文語体白話体之別。白話体不独用之談話。即書報中用者亦不少。此二者中。在中国人。以学文語体為易固矣。至如何始能分別二者而教之。則頗為一難問題。編者徵之實際之經驗。深知初学时二者併教之不可。故本書先使其組織文語之大体法則。然後再及白話。此亦編者苦心所在也。

ところで和文漢読という日本語学習法について、当時から評価が分かれている。『中日文通』（一九〇五）の著者張鴻藻は、「急がば回れ」と和文漢読法を次のように酷評している。

非取我国文字顛倒転用、而成此簡單不備之国語、（中略）読漢語而舍其虚字、欲速者終帰於不達。

また『日語教程』（一九〇六）の著者湘漁も反対意見を述べている。

数年前、吾国識者多倡導和文漢読之法、其意非不善、其法多不行、蓋僅采記若干之助詞、助動詞而不究其根源、一遇變化則成食古、勢必牽強付会、思索甚苦而誤謬極多。然則「和文漢読法」者、以已之意思、強解和文、非真能読和文也。

対して『日本文法輯要』（商务印书馆一九三三）は賛意を表している。

吾人之読日本文者、決無須以日本人之読法読之、盡可依吾国之読法、顛倒其詞句、刪去其語尾、改変其助詞、謂之「漢読法」……或以此種読法為求速成者之所臆造；然予則極贊成此種読法、以為便利而且正當。

ただしこの本は、「国難」、つまり上海事変の後に出版されたもので、日本語を次のように「方言」と卑しめている。

吾人對於日本文、不可認為外國文、當視為漢文之一種、即漢文之雜有日本方俗言語者。吾国文字、雜入方俗言語者甚多、即經史中亦縷見之。仏書中之梵語、元史中之蒙古語、尤連篇累牘、讀其文者、若不理解其方俗言語、則文義亦不易了解、但吾人固不因其雜有方俗言語、而不認為國文。日本通用漢文、為吾同文之國；惟於漢文中雜有假名以記其方俗言語。吾人苟稍加研究、識其假名、治其文法、則理解其文字、較之讀仏書與元史、猶易易焉。

客觀的に日本語を評価できる時代ではなかった。

6 小結…日本語はどこが難しいか？

二〇世紀初頭の日本語学習者にとって、日本語は必ずしも簡単ではない。それでは、どこが難しいか。中国語は形態変化のない言語と言われている。中国の日本語学習者はまず日本語の活用に困惑する。薛琛は『東語語法提綱』（一九〇〇）の中で、

忽而マス、忽而デス、忽而デアリマス、忽而マシタ、忽而マセウ、忽而キル、忽而エル、忽而オモフ、忽而オモヒマス、忽而ドコ、忽而ゴザリマス、忽而ゴザイマス、又有ク変キ、キ変イ、ム、ブ、ニ字變為ミ、ビ、ニ字、或又變為ン。此種詞滿紙皆是、安得不目迷五色、灰心而短氣也。

と指摘している。和文漢読法は、このような活用などを無視するようになっていくが、このような現実逃避策では日本語をものにできないはずがない。活用変化の他に、格助詞等のいわゆる虚詞類も中国語と大きく異なっている。『東文新法會通』（一九〇二）の著者廖宇春は、

東文辨名詞易、識虚字難、倘虚字之上雜以東文疑難閃爍之名詞、而初学往往索解不得。……日文最難辨別者、靜助詞、動詞、助動詞耳。

と指摘している。また『日本語言文字指南』（一九〇二）編者・王鴻年も助詞、助動詞の類いは日本語をマスターする上で非常に重要であるとし、次のように述べている。

則字体錯雜、文辭顛倒、学者苦之、于是又有望洋而嘆之感。此無他、不知其文法、故不解其趣旨、譬之入室者、必由于門、東学為室、東文為門、不得其門、則不能入其室也。況其意義錯綜、變化万殊、失之毫厘、謬以千里。

日本語のもう一つの難点は、漢字の発音の難しさである。戩翼翠が『東語正規』の序文での「日本所用漢字雖同音之字、字母均有一定音法。其法繁雜、非鑽研日久、未易弁識。」と言う指摘は代表的なものである。黄遵憲のいう「字同而声異、語同而読異、文同而義異」はすべて日本の土地に足を踏み入れ、日本の漢字に接した中国人の共通の感想であろう。このような「奇字」といわれる日本の漢字使用は、留学生らに「奇字解」というようなものを作らせた。『日語奇字例解』（一九〇五）を著した沈晉康は、

読日語不難、難於識奇字、如「矢釜シイ、間拔野郎、勝手氣盡」等字、苟不下以註解、無論何人、末（原文如此）有善悟之者也。今年以來、日語課本其稍有價值、為学界所贊許亦不下十數種。然未有涉及是問題者。間有之亦隔靴搔癢、未能驟悟。

と指摘している。音韻体系上の相違や表記と発音の乖離に加え、今日では音声教育に欠かせない国際音声字母の知識が欠如していることも大きな要因である。初めてローマ字表記を音声教育に導入した伊沢修二は『東語真傳』（一九〇三、泰東同文局撰）の巻頭「弁言」の中で、次のように述べた。

凡学東語者。有三難。一熟習字母之難。二尋繹語法之難。三措辭支絀之難。欲通東語。非除三難不可。

即ち仮名文字、文法、そして敬語を含む自然な日本語的な表現が日本語を習得する上で突破しなければならぬ三大難関である。そのために伊沢修二は、仮名にローマ字を付け、品詞、助詞類の使い方に關しても詳細に説明を行っている。

また『東語異同辨』（一九〇五）著者の張毓靈は、次のように指摘している。

余自庚子春抵東京学日語、歷寒暑四五度、經師友數十人、始獲稍窺門徑、其難可知矣。テニヲハ文法之難也、呉訓並用読法之難也、半濁音不易發、暗字不可顯、此又口音之難也。

この本は、日本語の中にある同音異義の言葉を分析する辞書で、話し言葉の運用能力を向上させるために編纂された。全書一五〇頁である。日本語を始めて僅か四、五年の作者が、このような書物を完成させたこと自体、驚きである。

『和文漢読法』によって引き起こされた日本語ブームは、学習の展開に従い、徐々に冷静になり、学習者は本格的な文法書を求めるようになる。その要望に答えるのは一九〇五年に刊行された『日本俗語文典』（呉初らによる）である。いわゆる「俗語」は、口語のことであり、序文では次のように述べられている。

口語者文字之母、文字者口語之化身也。然日本之語言文字、雖顯判兩途、要之不識其語言而欲明其文字者難矣。

と書面語に対する口語の優位性が強調されている。

二〇世紀初頭、口語が俗語と呼ばれることから分かるように、学習対象である日本語もまだ発展途上にある。現代語文法体系の構築、正書法の確立など近代国語の成立に欠かせない重要な作業はいずれも未完成である。このような状況が外国人の日本語学習を難しくしたのである。

- [1] 劉進才、『語言運動與中國現代文學』、中華書局、二〇〇七年、一三〇―一四頁。安德森著、吳叡人訳、『想象的共同体』、上海人民出版社二〇〇五年版三八―四七頁。
- [2] 漢字とそれによって記録されている典籍の間に切っても切り離せない関係が存在しない。
- [3] これは同時に中国人の日本語知識獲得の歴史と日本語翻訳集団の形成史でもある。それまでに全く存在感のない日本語が短期間に学習の対象になり得た理由、中国の民衆は日本經由で西洋の知識を取り入れることに躍起になった経緯、動機付けなどについて、筆者は「中国における近代知の受容と日本」(沈国威編『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』収、関西大学出版部二〇〇八年、一―四二頁)、『日本発近代知への接近——梁啓超の場合』(『東アジア文化交流研究』第二号、二〇〇九年、二二七―二二八頁)などで考察したことがある。
- [4] 沈国威『近代日中語彙交流史』、笠間書院、二〇〇八年改訂新版、七七―八二頁。
- [5] 『清季外交史料全書』(一六)『使日何如璋等奏分設駐日本各埠理事折』、光緒四年十一月十五日、學苑出版社一九九九年版卷一四、一〇二〇―一〇二二頁。
- [6] 何如璋『使東述略』、鐘叔河主編『走向世界叢書 日本日記等』、岳麓書社一九八五年、一〇二頁。
- [7] 沈国威『關於和文奇字解類資料』、『或問』第一期、二〇〇八年、一一七―一二八頁。
- [8] 沈国威『近代日中語彙交流史』、八九―一三三頁。
- [9] 日本語に関する記述はまず『日本雜事詩』(一八七九初版、一九九〇定本)に見え、その後『日本国志』に収められた。ただし後者の公刊は、一九九五年以後である。
- [10] 例えば、一部の語は遼人の方言から来たと考えている。漢音、吳音等に関する記述も『日本国志』と『日本雜事詩』とでは移動が見られる。
- [11] 『清季外交史料全書』(一六)『使日何如璋等奏分設駐日本各埠理事折』、光緒四年十一月十五日、學苑出版社一九九九年版卷一四、一〇二〇―一〇二二頁。「通事」は一般に口語の通訳を指している。彼らは書面語の能力にかなり劣っているので、「只得(やむなく)」とあるわけである。
- [12] 『清光緒朝中日交渉史料』第五卷「總理各國事務衙門奏遵議在日所招東文學生畢業後應如何待遇片」、光緒十年七月初五日。
- [13] これに対して許海華氏が異なる見方を示している。許海華『近代中国日語教育之發端——同文館東文館』、『日語學習與研究』、二〇〇八年、第一期五二―五八頁。
- [14] 編者も序文の作者も源氏名のようなペンネームを使用している。ここからも本書の性質が窺える。

- [15] 実藤惠秀『中国人の日本語研究』、国語文化講座6『国語進出篇』、朝日新聞社一九四二年、二七四頁。
- [16] 一八九八年に上奏したとされるこの上奏文は、公表した際(一九一一年)に修正した疑いがある。
- [17] 『改訳書局為訳書官局摺』、『中国近代出版史料補編』、張靜盧輯注、中華書局一九五八年、五一頁。
- [18] 馬建忠『擬設翻譯書院議』、張靜盧輯注、『中国近代出版史料・初編』、上海雜誌出版社、一九五三年、二九―三四頁。
- [19] 『時務報』第二七冊(一八九七年五月二七日)、第二九冊(一八九七年六月一〇日)、第三三期(一八九七年七月二〇日)。
- [20] 沈国威『時務報』の東文報訳と古城貞吉、『アジア文化交流研究』第四号、二〇〇九年。
- [21] 汪康年著、上海圖書館編、『汪康年師友書札』、上海・上海古籍出版社、一九八六―八九九年、一二七―七頁。
- [22] 梁啓超『論學習日本文之益』、『清議報』第一〇冊、一八九九年四月一日。
- [23] 梁啓超の知識は、羅普氏より得られたことはほぼ間違いない。
- [24] 吳稚暉は、一九〇一年の春日本に留學し、その年の冬帰国した。僅か数ヶ月だが、読み書きができるほどの上達ぶりだと言われる。
- [25] 黄遵憲は、『(維新以後的)日本職制章程條教號令……』概用和文「即日本文以漢字及日本字聯綴而成者也」と指摘し、日本語を初めて外国語と捉え、記述した人である。黄はまた同時に日本語の文体の差についても述べている。『日本国志』凡例、括弧の中は割り注である。一方、傅雲龍らの調査報告書では、日本語を方言と記述している。

参考文献

- ・ 沈国威『近代日中語彙交流史』、笠間書院、一九九四年(改訂新版二〇〇八年)
- ・ 李小蘭『清末日語教材之研究』、碩士論文、二〇〇二年
- ・ 李小蘭『丁福保與日語教科書』、『日本思想文化研究』第七期、二〇〇六年、九一―九七頁
- ・ 許海華『京師訳学館日文科之研究』、『日本思想文化研究』第九期、二〇〇七年、五四―五九頁

【編著者】

王 敏 (ワン・ミン)

1954年中国・河北省承德市生まれ。大連外国語大学日本語学部卒業、四川外国語学院大学院修了。宮沢賢治研究から日本研究へ、日中の比較文化研究から東アジアにおける文化関係の研究に進む。人文科学博士（お茶の水女子大学）。法政大学教授、上海同済大学客員教授。早稲田大学や関西大学などの客員教授を歴任。「文化外交を推進する総理懇談会」や「国際文化交流推進会議有識者会合」など委員も経験。現在、日本ペンクラブ国際委員、かめのり財団理事、朝日新聞アジアフェロー世話人など。

90年に中国優秀翻訳賞、92年に山崎賞、97年に岩手日報文学賞賢治賞を受賞。2009年に文化庁長官表彰。

主著：『日本と中国 相互誤解の構造』（中公新書）、『日中2000年の不理解——異なる文化「基層」を探る』（朝日新書）、『謝々！宮沢賢治』（朝日文庫）、『宮沢賢治、中国に翔る想い』（岩波書店）、『宮沢賢治と中国』（国際言語文化振興財団）、『日中比較・生活文化考』（原人舎）、『中国人の愛国心——日本人とは違う5つの思考回路』（PHP新書）、『ほんとうは日本に憧れる中国人——「反日感情」の深層分析』（PHP新書）、『花が語る中国の心』（中公新書）など。

共著：『<意>の文化と<情>の文化』（中公叢書）、『君子の交わり 小人の交わり』（中公新書）、『中国シンボル・イメージ図典』（東京堂出版）、『中国人の日本観』（三和書籍）、『日中文化の交差点』（三和書籍）など。

要訳：『西遊記』、『三国志』、『紅樓夢』など

中国語作品：『生活中的日本—解読中日文化之差異』、『宮沢賢治傑作選』、『宮沢賢治童話選』、『異文化理解』など多数。

〈国際日本学とは何か？〉

日本留学と東アジア的「知」の大循環

2014年11月20日 第1版第1刷発行

編著者 王 敏
©2014 Wang Min

発行者 高 橋 考
発行 三 和 書 籍

〒112-0013 東京都文京区音羽2-2-2
電話 03-5395-4630 FAX 03-5395-4632
info@sanwa-co.com
http://www.sanwa-co.com/

印刷／製本 日本ハイコム株式会社

乱丁、落丁本はお取替いたします。定価はカバーに表示しています。
本書の一部または全部を無断で複製、複製転載することを禁じます。

ISBN978-4-86251-170-6 C3036

本書の電子版(PDF形式)は、Book Pub(ブックパブ)の下記URLにてお買い求めいただけます。
http://bookpub.jp/books/bp/401

・許海華「近代中国日語教育之發端——同文館東文館」、『日語学習與研究』、二〇〇八年、第一期五二〜五八頁
・沈国威「時代の転型與日本途徑」、『中国近代思想史的転型時代』、台湾聯経、二〇〇七年、二四一〜二七〇頁
・陳力衛「梁啓超の『和文漢読法』とその「和漢異義字」について——『言海』との接点を中心に」、『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』、沈国威編、関西大学出版部、二〇〇八年、四二二〜四六二頁
・沈国威「日本発近代知への接近——梁啓超の場合」、『東アジア文化交流研究』、第二号、二〇〇九年、二二七〜二二八頁
・沈国威「日語難嗎？——以近代初識日語的中国人為說」、『東西學術研究所紀要』、第四三輯、二〇一〇年、一一九〜一三〇頁
・沈国威「近代中日詞彙交流研究」、中華書局、二〇一〇年
・纂輯 日本訳語 京都大学文学部国語国文学研究室編、京都大学国文学会、一九六八年